

メキシコの麻薬戦争と民衆歌謡

——ナルココリードから社会規範を読み解く——

受田宏之・宮地隆廣

●メキシコの麻薬戦争と社会規範

近年のラテンアメリカで深刻な暴力をもたらしているのが、麻薬カルテル間ないし麻薬カルテルと政府ないし市民の間の対立である。ホンジュラスなどの中米諸国では、小国でありガバナンスも脆弱なことから、人口比でみた麻薬関連の暴力は突出している。だが現在、研究者と国際メディアの注目を最も浴びている国はメキシコだろう。人口1億2000万を超える大国であり、域内では治安がよいとされてきた同国だが、1990年代後半から麻薬カルテルの関与した暴力が増え始める。カルデロン大統領（任期2006～12年）が軍も積極的に動員する強硬策を取って以降は、平均で毎年1万人前後の犠牲者が出ているともいわれおり、文字どおり「麻薬戦争」と呼ぶべき事態に陥っている。

メキシコにおけるとめどない暴力については、以下のような説明がなされてきた。

- (1) 地理的、構造的な要因：麻薬の巨大な市場であり、かつカルテルの使用する銃火器の供給先でもある米国にメキシコは隣接している。また、経済格差が大きく、安定した将来を見通しにくい低所得層が多い。
- (2) カルテルと政府間の協定の崩壊：カルテルと（主に地方）政府関係者の間には、麻薬の米国への密輸に主に従事し賄賂等を渡すのと引き換えに、特定のカルテルに縄張りを認めるといった暗黙の協定が存在した。だが、民主化と政党間競争の活発化にともない、その維持が困難になった。結果として、カルテルの棲分けは難しくなり、カルテルによる警察や市長らへの恐喝、暗殺も目立つようになる。
- (3) 大物の除去による不安定化：政府の対カルテル戦略は、幹部以上の大物の殺害や捕捉に重点を置いてきた。

た。この一見合理的でメディア受けもいい方針は、カルテルの内部抗争や競合カルテルによる攻勢、さらには統制を失った成員による合法的な経済活動への恐喝や抑制なき暴力の行使を招くこととなった。

これらのうち、(1)の重要性は誰も否定できないものの、それだけでこの規模の暴力を説明できるわけではない。(2)と(3)は制度にかかわる説明であり、実践的な政策含意を導きやすいことから、犯罪や紛争の研究者の間で有力である。だが、それらはともに暴力を行使する側の「合理性」を強調する一方、なぜ暴力以外の選択肢を取れなかったのか、どうして互いに疲弊し合うまで暴力を使い続けるかを明らかにしない。「暴力の合理性」は、それ以外の選択肢を限定するような規範の分析をとまわらない限り、偏っていて含意に乏しい説明に陥りやすい（参考文献①）。

日本のやくざの例をみると、1960年代以降、国家の側はやくざを許容したり、利用してきたそれまでのあり方を改め、「暴力団」の排除へと方針を切り替え、現在まで締付けを強めている。また、「頂上作戦」という名称が当初警察により用いられたように、組長の逮捕は排除策の要だった。これは、40年後のメキシコのカルテルに近い状況である。だが、やくざは、互いに争いつつ国家と社会に力で対峙するのではなく、巨大組織への編入やシノギの多様化を通じて存続を図ってきた。こうした行動様式を理解するには、やくざとやくざを取り巻く集団の規範とその変容を捉えることが必要である。

このように、近年のメキシコにおける暴力を説明するには、背景をなす構造的要因を認識しながら、犯罪組織に暴力の行使を促す制度上の変化を捉えつつも、それと同時に、制度の変化に特定の方向に反応するよ

うに働く社会規範も考慮した分析が必要となる。筆者らは、そのためには、ナルココリード (narcocorrido) と呼ばれる民衆歌謡の分析が有効であると考える。

●民衆の社会規範とナルココリード

権力と文字の文化へのアクセスに乏しい人びとの規範を把握するのは容易ではない。ラテンアメリカでは政府や公の秩序への信頼に乏しいという指摘が、歴史家、特に動乱期を研究した歴史家や、南北アメリカを比較した新制度学派、さらには価値規範に関する大規模なサーベイ・データを分析した論者らによってなされてきた。だが、それらがどこまで民衆の具体的な社会規範に迫っているのかについては疑問が残る。

麻薬戦争についても、規範に言及した研究は多い。警察や政府全般への不信が結果的に組織犯罪対策を妨げ、それが不信を深めていくという悪循環を指摘した研究もあれば、法規を尊重しない社会規範が麻薬カルテルの勢力拡張の一因となったとする研究もある。さらに、「合理性」仮説とは対極にある議論だが、カルテルの成員と支持者の間には「ナルコ文化」ともいうべきカルト的な下位文化が見出されると説く研究者も存在する(参考文献②)。だが、これら規範を扱った先行研究は、犯罪組織やその周辺にいる低所得層の規範を捉えるのには必ずしも適さない大標本のサーベイに依拠したり、主流文化からの逸脱を一方向的に断じるなどの欠点を抱えている。

こうした先行研究の不備を補うのに有効な手法に、民衆芸能や芸術作品から読み取れる規範の体系的な分析が挙げられる。メキシコの場合、適切な素材として、ナルココリードと呼ばれる民衆歌謡の下位ジャンルがある。それは、①文字を読めないか読むことの少ない民衆に関心のある出来事や人物、社会変容を歌詞にのせ、20世紀初頭のメキシコ革命前後に頂点に達するコリードと呼ばれる民衆音楽の伝統を受け継いでいる、②麻薬の生産、取引や消費にかかわる出来事や人物、問題をテーマとする、③1930年代に密輸入の死を描いた“Pablote”に始まり、刹那的で反社会的といわれる現在のコリードに至るまで数多くの多様な曲を含む、という点において、カルテルに

関与する者や彼らと階層的に近い人びとの規範を浮かび上がらせるのに適している。

歌詞をはじめとする曲の特徴を分析する際には、一般に、単語の出現回数やその共起関係(2つの語が同時に出現する関係)に着目することが多い。しかし、非合法的なテーマを扱う曲では複雑かつ婉曲な表現が多く、歌詞を文字どおりの意味で理解すると解釈を誤ることがある。このため、筆者らは実際に全曲を聴き、各曲についてその主題や政府や国家の扱いやその他の特徴を記録した後、複数の曲に共通する特徴を抽出する作業を行った。これは社会学でいう質的データ分析の方法と同じである。ナルココリードに関して既に優れた研究成果が著されているが、筆者らの分析の意義は、麻薬戦争に関する先行研究の不備を意識しながら、体系的な歌詞分析に取り組んでいることにある(参考文献③)。

●ナルココリードの歌詞分析(1) : Tigres del Norte

ナルココリードの歌詞分析として、最初に、メキシコ人の誰もがその名は聞いたことがあるだろうティグレス・デル・ノルテ(以下、ティグレスと記述)を取り上げる。ティグレスは、カルテルの影響力の強いメキシコ北部の出身者により1968年に結成された、今も現役の人気バンドである。学校教育の普及やマスメディアの発達にともないコリードが下火になるなか、そのナルココリードを通じてジャンルの復活に貢献してきた。それ以外にも、求愛と失恋、郷愁、賭け事、酒場での退廃から神への畏敬等々、農村やスラムに住む男性あるいは米国の不法移民——メンバー自体、不法移民だった——に訴えかけるテーマを気取らぬスベ

表1 Tigres del Norteのナルココリードの分類

分類	その基準	曲数	%	発売年の平均
1	裏切り等、密輸にまつわるドラマを描いたもの	13	19.4	1984
2	しばしば正義にもとる政府と臆することなく闘う麻薬関係者を描いたもの	11	16.4	1990
3	著名な麻薬関係者をモデルにしたもの	9	13.4	1995
4	成功者が一人称で自らの苦労や成功の秘訣を語る「出世もの」	15	22.4	2003
5	メキシコ政府の腐敗や米国の横暴、麻薬の消費や暴力のもたらす損失への批判に力点をおくプロテスト・ソング的な性格のもの	11	16.4	1998
6	その他(カルテル関係者の日常や教訓、悲哀など)	8	11.9	1995
計		67	100.0	1994

(出所) 筆者作成。

イン語で歌っている。注目すべきは、彼らの曲目のなかに社会の不正を糾弾し、望ましい国家の、国際社会のあり様を説くプロテスト・ソング——筆者のみたところ、少なくとも28曲——が含まれることである。

ティグレスのレコード化された全563曲のうち、67曲（重複なし）をナルココリードとみなすことができた。政府に対する視点や語り手に力点をおきつつ、表1のようにそれらを6種類に分けてみた。ティグレスのナルココリードは多様であることが分かる。その一方で、(1)から(4)へと歌詞の反政府、反体制志向が強まるにつれ発売年の平均が後の方にずれてくることは、麻薬取引の社会への浸透および政府と政府の説く秩序の正統性の低下を反映しているのかもしれない。より良い国家や社会を希求するプロテスト・ソング的な性格をもつコリード(5)が比較的最近多くリリースされているのは、麻薬の取引と消費が課す社会的費用が問題視されていくなか、「大御所」となったティグレスがバランスを取る必要に迫られたからとも考えられる。ナ

ルココリードの具体的なイメージを掴んでもらうため、(4)の「出世もの」コリードのなかで洗練された曲の和訳とそこから読み取れる情報を記しておいた。

●ナルココリードの分析(2)：「麻薬戦争」以後のコリードにみられる政府観と国家観

ナルココリードの先駆的存在であるティグレスに続く歌手達は、2006年に始まる「麻薬戦争」以後、さらなる人気を獲得するに至っている。続いて、この新しい歌手たちの曲にはどのような特徴がみられるのかを探ってみたい。現在の主要な歌手の作品を分析するにあたって、主として、メキシコ政府やメキシコという国家がどのように扱われているかを検討する。国家と政府は似た概念であるが、区別することができる。国家とは観念的な存在で、主権が保障された空間とそこに属する人間集団の総体として定義される。そして、政府とは国家を基盤として政策を執行する組織とそれを支える法制度を指すとする。最近のコリードはティグレスとは異なり、麻薬取引の成功や快楽を臆することなく正当化している。さらに、国家に対する意識がきわめて希薄である一方、政府を嘲笑や脅迫の対象とする傾向がみられる。

主要なアーティストの選定にあたっては米国の音楽雑誌『ビルボード』やナルココリードの代表的学術研究(参考文献③)を参照した。そして、9つのアーティストを対象に定めたいえ、2006年以降に出した最新アルバムから非合法行為に言及している曲を分析した。サンプル曲数は70である。

分析結果からまず驚かされるのは、70曲もの対象曲に「メキシコ」という国家を指す言葉がほとんど登場しないことである。名詞である「メキシコ」は4曲にのみ見られ、形容詞である「メキシコの」は変化形を含めて全く出現しない。これに対し、政府（政府全般、あるいは警察や司法など政府を構成する人物や組織）は24曲に登場し、このうち21曲が政府を否定的に描いているが、そのなかで半数以上の14曲が政府を無力に描いている（捜査情報は簡単に手に入る、逮捕されたらそれは運が悪かったに過ぎないなど）。

「インディオに罪はない (No tiene la culpa el indio, 2004年)」

インディオに罪はない

悪いのは代父であるあなただ

いい生活をしている連中も多かったが、

俺は腹が減って死にそうだった

蜂蜜を平らげる奴らのため、

俺は蜂の世話をしていたのだ

友人が俺に教えてくれた

すっからかんのときだ

よい木に寄りかかる者が日陰を得る (成功のためには役に立つ人間を選ぶ)

狼が怖いからといって、雌鶏を育てるのをやめるわけにはいかない

何事にもうまく立ち回る方法があるというが、

死については誤魔化せない

俺は努力して運命が変わった

多くの連中が俺を頼りにしている

俺の影響力を見込んでだ

メキシコからヨーロッパに

ひっきりなしに俺はでかける

マドリッドにはとてもいいコネがある

コロンビア人のよい取引仲間だ

ティファナ、メヒカリ、ファレスなど国境近くの都市から、

空路ないしトンネルで、俺は通過させてきたのだ

それが理由で、狐はおれに戦いを挑んできたのだらう

今では雄鶏 (=ボス) と呼ばれている

でかい闘牛だからだ

だが、黒いまだらのある子牛に過ぎないのに、

有刺鉄線を飛び越える連中がたくさんいるのだ

この雄鶏が倒れることがあったら、

連中に竜巻が降りかかるだらう

俺には触れない方がいい

触れた者は爆弾で吹き飛ばされる

俺を裏切った者には、誓っていうが、

隠れるところなどないのだ (筆者訳)

成功したボスによる一人称の語り。「出世もの」の1つ。自分のような畏怖される大物になるために必要な資質を説く。

下線の箇所=諺 (refrán) の挿入

この歌では非合法的活動は暗示されるのみ。国外への麻薬の密輸、裏切り者や自分にたてつく者の抹殺

狐 = 当時のFox大統領。政府に挑発的な姿勢

Tigresのコリードには家畜や野生動物の比喩が多い。

こうした政府のイメージは政府以外の特徴付けとつながりを持っていることも明らかになった。麻薬戦争以後のナルココリドで最も頻繁に登場するテーマは「ビジネスの成功」(39曲)であるが、政府を否定的にみる21曲のうち、実に15曲がビジネスの成功を歌っている。その比率は政府を否定的に扱わない歌(49曲のうち24曲)よりも高く、麻薬ビジネスで金を儲けることが政府の負のイメージとの対比によって際立てられていることがうかがわれる。

たとえば、米国国境の町ソノイータで活動する麻薬マフィアのボス「オチョ」を歌ったラリー・エルナンデスの曲の一節には、「ソノイータで政府は彼を見張るか／見ないふりをしている 縄張りを持つ彼は強いから／行動で見せるオチョをマフィアは尊敬している」とある。違法行為である麻薬密輸を取り締まるべき政府はオチョの存在を把握しているのに、報復や反撃を恐れて逮捕できないでいる。そして、無力なメキシコ政府とは対照的に、オチョは仕事のできる男として仲間から讃えられるのである。

一方、政府を否定的に扱いつつもビジネスの成功を歌わない残りの6曲は全て、政府への復讐や脅迫をテーマにしている。ナルココリドは総じて曲調が明るいのが、それに乗せて歌われる言葉は次の例にみられるように威圧的である。「サツは何とかしとくよ／現ナマか／弾丸で」(ロス・トゥカネス・デ・ティファナ「メチャ・コルタ」)。

●今後の展望——より体系的な比較に向けて——

麻薬戦争へと至るメキシコ民衆の社会規範の変容に接近する一つの試みとして、長いキャリアと広い人気を誇るティグレス・デル・ノルテの多様なナルココリド、および政府を嘲笑ったり脅す一方でティグレスにみられる社会全体を取り上げる意識の希薄な最近の歌手たちによるナルココリドの歌詞の分析を試みた。本稿では一国の事例に議論を限定したが、「歌が現実を示す鏡」であるというためには、時代やジャンルなどを広げた比較が望ましい。

筆者の一人は、ティグレスのナルココリドと北島三郎の仁侠歌謡を比較したことがあるが、後者においては現実のアウトローではなく理想化された新旧やくざの姿を反復する傾向があり、暴力的な表現や権力批判も皆無であった。もう一人は、最近のナルココリ

ドと犯罪を歌う日本語ヒップホップとの比較を試みているが、後者では前者とは異なり、憂国感情の表明をはじめ国家への言及が目立つほか、政府を手ごわい存在とみなす等、ナルココリドとは対照的な特質を見出すことができた(参考文献④)。これらの違いは、メキシコの麻薬カルテルと日本のやくざが、ともに犯罪組織とみなされながらも暴力を行使する程度に著しい違いのあることを理解する一助となるだろう。

(うけだ ひろゆき／東京大学大学院総合文化研究科准教授、みやち たかひろ／同准教授)

《参考文献》

- ① 麻薬戦争に関する日本語文献として、グリロ、ヨアン『メキシコ麻薬戦争—アメリカ大陸を引き裂く「犯罪者」たちの叛乱』(山本昭代訳)現代企画室、2014年がある。麻薬戦争の説明を試みた先行研究として、*Journal of Conflict Resolution*誌の第59巻8号(2015年)所収の諸論文を参照して欲しい。
- ② Sabet, Daniel M., "Corruption or Insecurity? Understanding Dissatisfaction with Mexico's Police," *Latin American Politics and Society* 55(1), 2012, pp. 22-45.
Bailey, John, *The Politics of Crime in Mexico: Democratic Governance in a Security Trap*, FirstForumPress, 2014.
Sullivan, John P. and Robert J. Bunker, "Rethinking Insurgency: Criminality, Spirituality, and Societal Warfare in the Americas," *Small Wars & Insurgencies* 22(5), 2011, pp. 742-763.
- ③ Ramírez-Pimienta, Juan Carlos, *Cantar a los narcos: Voces y versos del narcocorrido*, México: Editorial Planeta, 2011.
- ④ Ukeda, Hiroyuki, "Popular Image of Outlaws and the State: Organized Crime and Violence Seen through Popular Songs," paper presented for the IV Congreso Internacional de Ciencia Política en México, Monterrey, August 2016.
宮地隆廣「政府と国家の語られ方——『麻薬戦争』の時代におけるメキシコのナルココリドと日本語ヒップホップの比較——」ラテン・アメリカ政経学会第53回全国大会パネル報告、2016年11月。